

「峡北地域生え抜き」の科学技術人材の育成

～地域の「ハブ」としての役割を果たす中で～

■ 研究開発の目的・目標

地域や小中学校との交流による地域の理数系教育の普及に加え、地域が有する科学技術の存在を学び、それらを教材化することで地域を理解し、地域の活性化を目指していく。また、これまでの SSH の実績を活かし、課題研究の深化を目指すと共に、校内外において連携層の拡大を目指し、生徒や卒業生、地域の企業や大学などとの連携を広げていく。

■ 研究開発の概要

① 『地域への理数系教育のネットワーク拡大』

(1)地域の小中高の理数系教員のネットワーク形成、(2)地域の小学生、中学生のための科学の学びのための機会創設、(3)高校生による研究の交流の場としてのネットワーク形成、の3つのネットワーク形成を目指し、その過程を通して、地域の子どもたちの理数への興味関心の拡充、に貢献する。

② 『地域の理解と「研究マップ」の作成』

「研究マップ」には「過去の研究を検索できるデータベース」という意味と、「研究の相談相手・地域の科学人材の発掘」の2つの意味を持たせている。生徒たちが本校ホームページ上にある「研究マップ」を活用することで、研究活動への理解が深まるとともに、テーマ決定までの期間が短くなる。また、地元を対象とする研究が増え、それらの発表を通じて学校全体で、地域理解が深まる。

③ 『部活動におけるデータサイエンスの活用』

数値データを利用することで身近な生活や部活動にも、効率化や新しい発見があることを知るきっかけを創出する。さらに、データの収集方法やデータ分析の技術や知識を習得していく。

④ 『ICT等を利用した主体的な取組』

1つの実験に対して複数の手法でデータをとることで、より精緻な研究となることを知る。また、生徒のBYOD端末を利用して、校内だけでなく校外の生徒や大学・企業などの研究者ともオンラインで連携できるようになる。積極的に、科学に対する情報や成果物の共有化をし、生徒の知的好奇心や意欲を高める。

⑤ 『客観的な評価方法と方略の実践』

R7年度に作成したルーブリックを活用し、修正版を作成する。生徒の非認知能力を見取る方法を模索し、ルーブリックの結果と重ね生徒の変容をよりの確に視とる。

■ 次期申請に向けてのスケジュール（県教委からの提示）

2月	・中間評価の改善状況の確認	9～10月	・申請書作成（旧様式）
3月	・R8年度取組の強化ポイントの確認	11月	・申請書作成（新様式）
4月	・R9年度申請の目玉の決定 ・県教委との打ち合わせ	12～1月	・模擬ヒアリング
5～6月	・目玉実現への準備 ・新たな取り組みの計画	1～2月	・ヒアリング
7～8月	・ポンチ絵作成 ・中間評価改善のまとめ ・Ⅲ期成果のまとめ	3月	・結果通知